

私は現在、「NPO法人・キャリア・サポート・ネットワーク」の代表理事兼専任カウンセラーを務めています。この法人は開設してから十数年にたりますが、その前身は、旧労働省（現厚生労働省）により中野サンポラザ会館内に設置され、2003年に、その30年に渡る長い歴史を閉じて「サンポラザ相談センター」です。この相談機関は、激変する戦後の時代のため、若者の生活や職業全般に亘り、そのときどきの若者たちの悩みや葛藤に向き合ってきたのですが、閉鎖前の数年間は本当に深刻な引きこもりの事例が急増し、彼らの苦悩と疑問に日々直面することとなりました。社会復帰支援センターから依頼された方々とお会いしていると、困難な状況と格闘していた頃が、まさに今、より困難さを増して眼前に立ち現れている、そんな感慨を抱かれます。

「引きこもり」が社会問題化してからおよそ20年、それは、その10年ほど前に閉ざす門に出された「いじめ」の問題と無縁ではおはいでし。人に対する恐怖や不信感に苦しむ彼らの心の底を辿っていくと、多くが子ども時代の「いじめ体験」に突き当たります。また、それ以前に何らかの被害体験を積んでいる方もあります。そのために、個別で複雑な事情が幾重にも絡み合っており、彼ら自身の手では解きほぐせないのです。そうした状況に立ち向かう力を失った彼らは、これ以上傷つくことから身を守るために何重にも張り巡らした要塞のたかき閉じこもります。その要塞は、どろりとも打ち壊せぬほど堅牢で外側からの働きかけは何も通じないようになっています。しかしおれらのカウンセラーは、その堅固な厚い壁の何より、差し伸べられる手を待ち望んで打ち震える幼子のようにナイーブな彼らの姿を小と垣間見ることがあるのです。外側には、頑固な時には暴力的な荒い顔面を向けつつも、彼らの心と外界を繋ぐ糸を僅かな隙間を縫って差し入れてくれる手を彼らは、どこかで待っているのだと思ふのです。その手を掴めば、彼らはきっと変わるきっかけを得られるでしょう。

我が国敬愛する心理学理論の師エリック・バーンも言っている如く、「人は誰でも変わる事ができるのです。そして自分で道を選べ、自分の足で歩く事ができる」のです。今、そのチャンスが訪れているのかも知れません。もう「親」ではなく、誰か他人にいつか自分を委ねてみるのもいいでしょう。人は「親と離れてひと」となる（尾立倫行・日本放送出版協会、2006）のです。

使命遂行に邁進する社会復帰支援センターの情熱と実力に大いに期待するとともに、弊社の機関が少くとも相談される方々の支えとなりまことを願っております。

新地 加奈枝

2016. 5. 15.